

大学生に対する学習支援の効果

大関 健人

近年の18歳人口の減少から定員割れを起こす大学が現れ始め、大学全入時代と呼ばれるようになった。一方、大学進学率は2009年現在で56.3%であり、日本の大学教育はユニバーサル段階に入ったと言われている。これらを受けて、大学生の質が危ぶまれるようになり、大学での教育が見直されるようになった。このような状況の中大学図書館は大学生に対して学習支援のためにラーニング・コモンズの整備やレファレンス・サービスの拡充等といった、学習をする「場」の提供や、情報リテラシー能力の獲得を図る等様々な取り組みを行ってきた。しかし、それらの取り組みが実際の程度の効果を挙げているのかがはっきりと示されていない。本研究は大学図書館における種々の学習支援サービスを取りあげ、その効果を計測することによって、今後の大学図書館における学習支援の在り方を考えていくことを目的とする。

本研究では筑波大学附属中央図書館において来館者調査を行い、収集した調査票を、IBM SPSSを用いて集計、分析を行った。調査票の質問内容は①調査対象者の学年や身分、②調査対象者の所属、③研究室・実験室、自宅、中央図書館の各利用頻度、④中央図書館の利用目的、⑤各種の中央図書館のサービスの利用頻度、⑥それらの図書館サービスを利用することにより効果（アウトカム）を得ることが出来たか、⑦図書館に対する満足度とした。

調査の結果、1) 附属図書館や研究室など大学施設が日常的な学習場所である学生が多い。2) 趣味や娯楽の目的よりも研究や学習のために図書館が利用されている。3) 学生の利用頻度が高いのは図書館内のPCであり、図書館側が学習支援として考えるレファレンス・サービス等の利用頻度は低い。4) 自宅での学習効果は他の場所と比較して低い。5) 学生は図書館内のPCの数に不満を抱いている。6) 文系の学生と学群生は図書館内のPCの利用に学習の効果を感じている。7) 大学院生はレファレンス・サービスに学習の効果を感じている。ということが分かった。

今回の研究で、館内のPCやレファレンス・サービス等の図書館が提供するサービスが学生に対する意識変化や知識データの入手といった形で効果を発揮しており、学生も学習支援の効果を感じていることが分かった。しかし、今回の調査で学生サポートデスクやアカデミックスキルズ図書等の新しいサービスの利用が見られなかったのは、学生がそれらのサービスの存在を知らなかったという可能性が考えられる。今後の調査でそれらのサービスの効用を調査し、これからの学習支援の在り方を考えていくことが課題となる。

(指導教員 歳森 敦)